

～バトンパス～

～認知症ケアを通して見えてきた共有の在り方～

部署名：アルカディア通所リハビリ

発表者；◎宮城梨子 砂川あきの 金城江理香
荷川取あかね 中村夏美 屋嘉比盛嗣

【はじめに】

アルカディア通所リハビリテーションは、利用者様の住み慣れたご自宅で最後まで在宅生活が送れるよう、本人・ご家族や各事業所と密に連携を取り、支援をしていく事が役割(特徴)である。

今回のケースは要介護認定後、介護保険サービスになかなか繋げることが出来ず地域包括支援センター、居宅介護支援事業所からつながり、当通所を利用する運びとなったが、利用開始時、本人の想いを汲み取ることが出来ず利用中止をとってしまった。再度利用に至るまでの、関わり方や情報共有の在り方について見えてきた事を報告する。

【事例概要】

利用者：S・S様 男性

性格：頑固な性格・心配性・恥ずかしがり屋

疾患名：アルツハイマー型認知症

認知症度：Ⅲa 寝たきり度：J2

【利用までの経緯】

平成29年度、認知症研修などの地域の集まりへと妻が参加していた。性格上、地域との関りも薄い状況のなか、入院を機に介護保険申請するも介護サービスへと繋げることが出来ず、包括支援センター協力のもとまずは「カフェおともだちの和」(地域の集まり)への参加に至る。当デイケアでの開催であったため、これを機に本人とのかかわりがはじまった。

【調査方法】

・自宅訪問時に家族への聞き取りを行った。再度繋げることができたのはなぜだと思ふか。という質問に、本人の記憶の中で「アルカディア」という単語は覚えており、職員の顔も覚えていたため、再開時に顔見知りがいる環境ができていた。また、本人が一日利用ではなく半日利用から開始したことが本人へ過度のストレ

スをかける事なく関係を築く事が出来た。

【考察】

初回利用時は「一日型の利用が良い」と、家族の意向が強くなり、本人の理解が得られないまま参加となった。お友達の和でもご家族と一緒に参加されていたが帰宅願望が見られる方で、当デイケアでの支援方法などのアセスメントが不十分な状態でサービスを提供していた。本人の想いを十分にくみ取れずにサービスを開始したため、利用中止となってしまった。

再度利用時には本人の「安心できる環境」を作るため送迎対応者も馴染みの職員へ統一し安心感につながったと考えられる。配席も職員が常に声掛けを行える場所へ設定。同時に、不安感が増すことで帰宅願望に繋がる事。一度、中止となった利用者であること。その背景、半日からの再開も含めて職員間で情報共有を行ったことで、本人へ関り方に変化が生まれ、うまく言った内容を共有する。等、質の高いコミュニケーション環境が醸成できた。

【まとめ】

成功体験の共有は現場のコミュニケーションが活発となりポジティブな取り組みへの動機づけとなる。その為には、リスク面だけでなく日頃の会話を通し情報収集・個々の職員の持つ情報を発信する事が大切であると考えられる。リアルタイムな情報共有やケアの工夫を共有することが次に関わる人へのバトンパスとなり本人へ寄り添ったケアを提供できるチームとなる。今回の関わりを通し、利用者やその家族も含め情報という名のバトンを繋いでいく事でその人らしい生活に繋がる事を再認識できた。情報の質を互いに高め合いながら利用者の在宅生活に寄り添える通所リハビリを目指したい。